

銘心会南京より12月集会のお知らせ

私たちは、2014年から毎年、1937年12月 旧日本軍によって引き起こされた南京大虐殺の歴史認識を広めるドキュメンタリー映画を日本で初めて開催しています。

被害にあった人たちは、「南京大虐殺の惨禍を繰り返さないで。平和が一番なのです。」と今も語り部を続けています。私たち銘心会南京と活動の主催者は、30年以上前から戦争被害者の老人たちを日本に招請し、証言集会を開催してきました。

同時に20年以上、年を重ねた生存者たちに「心のケア」活動を続けています。今回2024年12月は、大阪で『ジョンラーベは訴える―南京の地獄』の上映会と大阪大学平和学研究の木戸衛一さんを迎えて講演会を開催いたします。

このドキュメンタリー映像は、南京安全区国際委員会を欧米人とともに設立し、委員長を務めた、ドイツ人・ジョンラーベを主人公に取り上げています。

ラーベは、日本軍の中国の首都南京への侵攻にかぎりない危機感を持ちました。そして、中国軍に交渉し、更に対応が困難な日本軍と交渉を重ねました。それは、日本軍の殺戮から中国市民の命と暮らしを守る安全地帯の設置が迫られていたからです。

南京が陥落して日本軍は、「安全」どころか、市民への虐殺や放火、破壊、強姦などを限りなく南京で起こしました。

ラーベと国際委員は、対応に走り回り、中国市民を保護しようとしてしました。

しかし、南京の街の路上いたところで中国市民の死体と遭遇しました。

ラーベは「この惨状を後の証言として話せるように」と毎晩 疲労と闘いながら、克明に日記を書き綴りました。

ラーベは、南京安全区に避難した25万人の中国人の命を救おうとしてしました。

しかし日本軍による安全区の解散命令とドイツシーメンス社の帰国命令が下り、明けて2月には帰国せざるを得ませんでした。それを知った難民たちはラーベに「行かないで」と嘆願しました。

帰国したラーベを待っていたのは、戦争へ突き進む厳しいドイツ政府の圧迫でした。

その後のラーベの運命と現在に至る彼の思いは、ぜひドキュメンタリーを見ていただきたいと思います。

皆さん12月1日には、ぜひ大阪での初公開『ジョンラーベは訴える―南京の地獄』と講演会にご参加ください。